

# 創造目的論序説

～人類が忘れていた3つの命題の意外な大発見～

創造目的学会 著

## 目次

はじめに .....	3
第一章 3つの命題 .....	4
第一節 創造目的学会 趣意書 .....	4
第二節 3つの命題の補足説明 .....	7
第二章 3つの命題と各科学分野との関わり .....	9
第一節 人文科学 .....	10
第二節 社会科学 .....	12
第三節 自然科学 .....	14
第三章 3つの命題と各思想との関わり .....	17
第一節 目的論 .....	17
第二節 機械論 .....	17
第三節 進化論 .....	17
第四章 3つの命題がもたらすもの .....	20
第一節 人生を幸福にする秘訣 .....	20
1. 3つの命題に沿う .....	20
2. 宗教が教えてきたこと .....	21
第二節 家庭を幸福にする秘訣 .....	21
1. 家族とは .....	21
2. 愛とは .....	22
3. 一族繁栄の道 .....	22
第三節 社会を幸福にする秘訣 .....	22
1. 社会を幸福にする政治 .....	22
2. 社会を幸福にする法律 .....	22
3. 恒久平和を求めて .....	23
参考文献 .....	24

## はじめに

今日は2005年3月11日。テレビでは、連日、株をめぐる問題に話題が沸騰しており、また、殺人事件によって罪のない人々の命が奪われたニュースが飛び込んでくる。毎日のように繰り返されるこれらの事件は、起きるたびに原因が分析され、2度と同じ過ちを繰り返さないように人々の注意を喚起するのに、また再び同じような過ちを繰り返す人が出てくるのが常である。

それはなぜなのか。それは人間が、あるひとつのことに気がつかずに今まで来てしまったからである。個人から社会全体においてまで、人間はこのことに気づかずに試行錯誤を繰り返している・・・。

この本は、創造目的学会の学術テーマである創造目的なるものについて綴られているのだが、今まで人間が気づかずにきたものというのが正にこの創造目的と呼ばれるものである。これをわかりやすくご紹介するのが、この本の役目である。

創造目的とは「絶対者が存在世界を創造したときの絶対者の目的」を言う。

創造目的学会は、原子の存在から、原子の複合体である物質世界、生物界、そして人間の心と体、人間社会にいたるまで、あらゆる領域における相対的關係が絶対者の創造目的によって与えられていると見ている。

このように見ることによって、数多くの未解決問題に対する明快な解答を導き出すことができるのである。

## 第一章 3つの命題

ここでは、まず、創造目的学会の趣意書をお読みいただくことにする。

### 第一節 創造目的学会 趣意書

これまで、科学において、絶対者、すなわちこの世界を存在たらしめた根源的主体、についての議論は、枠の外に置かれてきた。これまでの科学は物質世界だけを議論の対象にしてきた。科学が絶対者の存在を否定したということではない。それでも、科学者は、絶対者の問題を担当外の形而上学の問題として捉え、言及することを避けてきたのである。そして、この問題はもっぱら宗教者や哲学者の担当分野として扱われてきた。宗教者の直観的思考方法は科学者の思考方法とは性質の違うものであり、科学者と宗教者が席を同じくすることはできなかった。

しかしながら、この両者を分けて考える限り、人類社会がさまざまな悩みを抱え続けなければならないことに、多くの人は気づき始めている。

このような現実の状況において、創造目的学会が発足された意義はきわめて大きく、この学会が、まったく土俵を異にするこれら2つの領域の間に橋を架ける作業を担うことを期待している。

これは、人類が全体的調和を得るために必ず現れなければならない、時代的要請によるものだと思う。

しかしながら、そもそもそのようなことが可能であると気づいた人がこれまでにいたならば、この調和はとっくの昔にもたらされていたはずである。そのようなことが不可能だと誰しも思っていたがゆえに、宗教と科学はそれぞれの領域において、互いに干渉することなく発展してきたのである。

(神や霊界などの) 目に見えない世界と、(肉眼や検出器を通して) 目に見える世界。この両者は明らかに次元を異にする世界であるが、この両者の接点はいずこにあるのだろうか。

つまり、我々は、絶対者が存在しなければ、人間はおろか、この世界も

存在し得ないということに論及したいのである。すなわち、科学と宗教の中間に立って、どちらの方向にも向くことができる双方向の、不滅で絶対的な通路を完成させたいわけである。

ここに、すべての存在しているものには、絶対者によって創造された創造目的があるというのが、本学会の基本的立場であり、創造目的とはいかなるものであるかを明らかにしようとするのが本学会の目指すところである。

ここで、我々が考えているひとつの命題を提示したい。

「1. 存在しているものは、いかなるものであっても、相対的關係を結ぶことによって初めて、存在している。」

いかなるものも他者との間に相対的關係を結んでいなければ存在すら出来ない。これは宗教においても言われていることであるが、科学の根幹に位置付けられるべき命題だと思っている。我々はこの文言を原理講論という書物の中に発見した。

例えば、眼の進化を考えてみたときに、眼は最初のきわめて単純なしくみから自然淘汰という鍛錬を受けて進化してきたというけれど、この一番最初の、まだ眼と呼ぶのもおこがましいような眼の最初の形である眼点であったとしても、眼点が発信する視覚情報が母体である細胞と関係を持っていなければ、眼点に存在の意味はまったくなく、進化のスタートラインには立てなかったのである。すなわち、眼点と母体との相対的關係は進化の大前提として進化よりも先にあったのである。この相対的關係がなかったとしたら眼点は眼点と呼ぶことができない。機能には必ず相対的關係がある。

また、地球は太陽との間に相対的關係があるからその周りを回り続け進化の歴史を刻んできたのであり、もし、この相対的關係がなければ、地球という星もこのような姿になることは出来なかったし、生命を育むことも

できなかったのである。

また、物質の基本単位である原子は、陽子と電子の相対的關係によって原子として存在し、かつ、原子間の力を生み出して、分子を構成している。もし、この陽子と電子の相対的關係がなければ、原子なるものは存在しないし、物質も存在していない。また、この陽子の起源について、陽子を構成する素粒子について議論することができるだろう。しかしそれも、素粒子間の相対的關係と相互作用によって陽子が存在するようになると言わざるを得ないだろうし、そのような素粒子間の相対的關係があることを認めざるを得ない。このように、いかなるものの存在にも絶対不可欠な相対的關係なるものは最初からあったものとして受け入れざるを得ないであろう。

相対的關係があるということは当り前のように考えられてきたかもしれないが、これは当り前のことではない。2つの積み木をいくらくっつけようとしてもそれらは引き合わない。相互作用を可能ならしめているのは、相対基準を結ぶことができる相対的關係があり、関係を結ぶ両者に、同じ「特性・性質」を所与した、より主体的な存在がいるからこそである。相対的な関係を結ぶことが出来るというのはその存在自体内では解決しようのない所与の特性である。すなわち、その特性を与えた主体は、別に存在しなければならない。相対的關係によってこの世界を存在たらしめようと設計し創造した主体の存在である。

すなわち、絶対者の創造の目的があるからこそ、相対的關係も存在するのである。

「2. 相対的關係が存在する理由は、絶対者の創造目的にある。」

相対的關係を結ばしめるための絶対者の思惟があつて、そのように存在界が存在しているからこそ、その上で、相互作用があつて発展も生まれてくるのである。

二者間に相対的關係があるからこそ、相互作用が可能なのであり、その結果として、永遠にそこにとどまっていることも、繁殖し進化することも、より大きな構造体を構成することも出来る。

相対的關係と相互作用・発展との關係は、

「3. 相対的關係にある二者が、相對基準を造成し相互作用すれば、生存と繁殖と作用などのためのすべての力を發生する。」

科学は、この相互作用を發見し、その性質について探究してきた。が、その前提となる相対的關係については論及してこなかったかもしれない。この「相対的關係があること」こそが、この世界をデザインし創造した神の知性の表れと言える。この相対的關係がなければいかなるものも存在し得ない。

すなわち、絶対者が存在しなければ、人間はおろか、この世界は一切存在しないのである。

原理講論を出典とする、以上の3つの命題を一般的原理として、創造目的学会を設立する。

本学会は、この命題に基づき、人文科学、社会科学、自然科学などあらゆる分野の科学と宗教に全体的調和をもたらすことを趣旨とする。

## 第二節 3つの命題の補足説明

命題というのは定理みたいなもので、正しいことが確認されたことを意味する。この3つの命題が間違っていると思われる方がいらっしゃったならば、創造目的学会に異見を述べていただきたいと思う。学説というのは、仮説から始まり、経験などを通して、正しさがだんだんと人々に確認されていくものであって、人間は議論を通して、より正しいものを求めていくのであるし、学会というのはまさにそういう作業を行うところなのである

から、異見は大歓迎である。この命題については、いままで誰も考えてこなかったのであるから、初めからすべての人に受け入れられるとは毛頭考えていない。問題提起として捉えていただければ幸いである。



## 第二章 3つの命題と各科学分野との関わり

3つの命題をもう一度書くと、

「1. 存在しているものは、いかなるものであっても、相対的關係を結ぶことによって初めて、存在している。」

「2. 相対的關係が存在する理由は、絶対者の創造目的にある。」

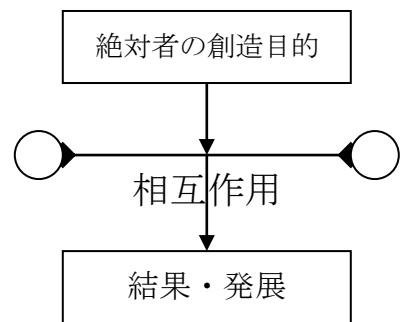
「3. 相対的關係にある二者が、相対基準を造成し相互作用すれば、生存と繁殖と作用などのためのすべての力を発生する。」

ひらたく言えば、どんなものでも何かと関係を持っていて、その関係は神様が目的をもって与えてくれたものであり、その関係を通して互いに作用しあえば新しい発展がある、ということである。

これを、当たり前のこととして受けとめる方もいらっしやることだろう。

しかしながら、この命題がいままで誰によっても明確に命題として提出されたことはなかったのである。いままで誰もこれを明らかな真実として捉えることは出来なかった。なんとなくそうかもしれない、神様がいらっしやって私たちをいつも見守ってくれているんだということぐらいは多くの人が認識してきたが、これを明確な命題として定義したということは実に大きな意義があるのである。そしていかなるものもこの原則の上に存在しているということは、すべての存在とそれらを捉えるすべての学問分野の上位概念としてこの命題が位置付けられるということである。すなわち、社会科学が政治を導き、自然科学が生活をより豊かにするのであるから、その上位概念として位置付けられるこの3つの命題はあきらかに生活の全般にかかわってくるということである。

人間はさまざまな学問分野を開いて色々なことを考えてきたのであるが、ここで、どのような学問分野も、この命題の土台の上に成り立っているということを確認しておきたい。



## 第一節 人文科学

人文科学は、人類の文化全般に関する学問の総称である。自然科学・社会科学に対して、歴史・哲学・言語などに関する学問をいう。

哲学は、世界・人生などの根本原理を追求する学問であり、知識の体系として諸学の根底をなしている。認識論・論理学・存在論・倫理学・美学などの領域を含む。

このうち、認識論は、認識の起源・本質・方法・限界などについて考察するが、ここには認識する主体と認識される対象との相対的關係という図式が成り立つ。認識の起源とは認識がどこから生じるかという問題で、認識主体についての問題である。これは、認識が経験することによって得られるとする経験論と人間が生来からもつ絶対理性によって得られるとする理性論に分かれる。また、認識の本質とは認識の対象についての問題として、対象が主体と独立して実在とする立場と知覚されて初めて存在するとする立場がある。また認識の方法とは認識の成立過程についての問題である。

また、今日においては、五官を通して外界を認識する人間の脳におけるメカニズムということを誰しも思い浮かべると思う。認識主体の人間と認識対象である外界との相対的關係ということになる。また第六感とは霊的世界を認識する霊的感性のことである。

このように認識論は、認識主体と認識対象との相対的關係について論じたものであるが、この相対的關係の成立は、3つの命題に基づいて絶対者の創造目的によってもたらされたものだと言える。認識の主体である人間が持つ六つの感覚は、絶対者の創造目的によって、認識対象と相対的關係を結ぶためにもたらされたものである。

倫理学は、共同体における人と人との関係を律する規範・原理・規則など倫理・道徳を研究するが、倫理学の究極的な目的は、そのうち何が最もふさわしいかを研究することであろう。3つの命題に基づけば、人と人と

の関係は、絶対者の創造目的からくるところの相対的關係に一致することがもっともふさわしいことであるのは当然のことであるから、倫理の根本は絶対者の創造目的にある。

美学や文芸などの芸術は、美の本質、美的価値、美意識、美的現象などについて考察する学問であるが、それは、美を感じる主体である人間と美の対象との間に成り立つ相対的關係を扱った学問だと言える。これは認識の上に成り立っている。

美を感じるのは、美の対象に絶対者の創造目的と一致する点を見出すからである。

自然は、人間が美を学び、美を感じる最も基本的な要素であるが、なぜ自然に美を感じるのかといえ、それが絶対者の創造によるものだからである。

人間の創作活動も、絶対者の創造目的を追求し、あるいは実現しようとするものに他ならない。

言語とは、音声や文字によって、人の意志・思想・感情などの情報を表現・伝達する、または受け入れ、理解するための約束・規則、またその記号体系のことである。音声を媒介とするものを音声言語（話し言葉）、文字を媒介とするものを文字言語（書き言葉）、コンピューターなど機械を媒介とするものを機械言語・アセンブリ言語などという。

言語は、情報を発する主体と受ける対象との間の相互作用を扱った学問である。

発信と受信の両方が可能でなければ言語は成立しない。その両者の相対的關係の上で、相互作用する手段が言語である。人が有する発信能力（口、手などとそれらをつかさどる脳）と受信能力（耳、目などとそれらをつかさどる脳）は、絶対者の創造目的によってもたらされたものである。

もともとその能力が備わっていなければ言語は成立せず、言語なるものはなかった。なのでその能力と相対的關係は所与のものである。決して言語の必要性がその能力を備えさせたわけではない。能力が備わっていたか

ら対話が成立し言語が発展したのである。すなわち、言語は、絶対者の創造目的の上にある。

## 第二節 社会科学

社会科学は、社会現象を研究の対象とする科学の総称で、政治学・法学・経済学・社会学・社会心理学・教育学・歴史学・民族学などが含まれる。

社会現象とは人間の社会生活や社会関係から生じる現象のことで、人間どうしの相互作用の結果であるから、社会科学は、人間どうしの相互作用の問題を扱った学問だと言える。

人間は誰でも一人の父と一人の母の間に生まれてくる。これに対する例外はない。すなわち、人間も、絶対者の創造目的からくる相対的關係の中から生まれてきた存在として、絶対者の創造目的を実現する実体として存在しているのである。

また、人間は同じ父母を持つ兄弟姉妹という関係を持つようになる。社会全体は人間によって構成されたものだが、その最小単位は、父母とその子供達、すなわち家庭であるといえる。夫婦間の相対的關係とその相互作用の結果としての子女という家庭の基本形は、人類が誕生した当初から成立していた、3つの命題に当てはまる基本形である。

そして、社会は家庭の集合体であるといえる。

政治学は、政治に関する諸学問のことで、政治哲学・政治科学・政治史などがある。政治とは何かといえば、主権者が領土・人民を治めること、あるいは、ある社会の対立や利害を調整して社会全体を統合するとともに社会の意思決定を行いこれを実現する作用、ということになる。

政治の目的は社会全体の統治であるが、社会が存在する根本的理由は絶対者の創造目的にある。たとえどんなに社会が拡大したとしても、根源が絶対者の創造目的を離れることはありえない。すなわち、社会全体のあるべき姿も、個人や家庭のあるべき姿も、絶対者の創造目的と一致しているのである。ゆえに、政治は絶対者の創造目的の実現を志向している。

法律学は、法に関する学問のことで、法解釈学・法哲学・法社会学・法史学・比較法学などを含む。法とは構成員が守るべき規範で、法律とは、社会秩序を維持するために社会の構成員に強制される規範であり、民主主義国家においては立法府である国会の議決を経て制定される。社会秩序とは絶対者の創造目的が根源となっている。ゆえに、社会秩序の維持を目的としている法律は、絶対者の創造目的を明文化したものに他ならない。

経済学は、経済現象を研究する学問で、理論経済学・経済史学・経済政策などがある。経済とは、人間の生活に必要な財貨・サービスを生産・分配・消費する活動、また、それらを通じて形成される社会関係のことをい、財貨・サービスを媒介とした人間どうしの相互作用のことである。

人間は絶対者の創造目的を実現する実体として存在している。ゆえに、人間の生活の営みである経済も絶対者の創造目的を志向している。

教育学は、教育の本質・目的・方法および制度・行政・歴史などを総合的に研究する学問である。教育とは、ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけることであり、知識の啓発、技能の教授、人間性の涵養(かんよう)などを図り、その人のもつ能力を伸ばそうと試みることである。

人間の望ましい姿とは、絶対者の創造目的と一致した姿である。ゆえに、知識教育とは、絶対者が天地を創造した英知を学ぶことであり、技能教育とは、絶対者の創造性を受け継ぐことであり、人間性の教育とは、絶対者が天地を創造した創造目的を理解し、そのごとくに生きる豊かな人間になるということである。

歴史は、人間社会、すなわち人間どうしの相互作用の時代的推移を扱った学問である。人類の歴史はどこへ向かっていくのだろうか。人類という存在の根源が絶対者の創造目的にあるので、人類が向かう行き先も絶対者の創造目的の実現に他ならない。自由と平和、理想の楽園と呼ばれる世界

とは、絶対者の創造目的と一致した世界のことである。

いままでの人類歴史は試行錯誤の繰り返しであったことを否定する人はいないと思う。これまで人類は絶対者の創造目的という言葉を知らなかった。それを知らないまま、試行錯誤を繰り返してきたが、いまだその出口を見出すことが出来ずにいるのではないだろうか。しかしながら、絶対者の創造目的という言葉を知ったこれからの人類の行く道はこれまでと全く違って来るであろう。灯台の光を見出した船のごとく、安らぎのある港に向かってまっすぐに進んでいくことができるようになることと思う。

### 第三節 自然科学

自然科学は、自然界の現象を研究する学問であり、実験・観察・数理に支えられて、対象の記述・説明、さらには事実間の一般法則を見いだし実証しようとする経験科学である。天文学・物理学・化学・地学・生物学などに分ける。

天文学は、天体の位置・運動・性状や化学組成・進化などと、宇宙の構造・進化などを研究する学問であり、位置天文学・天体物理学・天体力学に大別される。天文学は、天空に位置する物質間の相互作用について研究する学問である。

物理学は、物質の構造・性質を明らかにし、それによる自然現象の普遍的な法則を研究する学問であり、運動・熱・光・電磁気・音などの諸現象をはじめ、素粒子・核・宇宙線・量子エレクトロニクスなど対象は広く、精密な実験によって量的な把握を行い、数学を応用して表すことに特徴がある。

物理学は、物質全般についての相互作用を研究する学問である。

化学は、物質を構成する原子・分子に着目し、その構造や性質、その構成の変化すなわち化学反応などを取り扱う学問であり、対象や研究方向により、無機化学・有機化学・物理化学・生化学・地球化学・核化学などに

分けられる。

化学は、物質の相互作用から生じる構造、構造の変化を研究する学問だと言える。

地学は、地球およびその構成物質に関する科学であり、地質学・地球物理学・地球化学・岩石学・鉱物学・海洋学・気象学・地形学などを含む。

地学は、地球を構成している物質の相互作用、および地球と星々との相互作用について研究する学問である。

生物学は、生物および生命現象を研究する学問であり、対象とする生物の種類によって動物学・植物学・微生物学などに分けられ、研究手段・目的によって分類学・生態学・発生学・生化学・遺伝学・分子生物学などに分かれる。

生物学は、生物内組織および生物間、生物と環境の相互作用ならびに相互作用から生じる変化について研究する学問である。

心理学は、生物体の意識や行動を研究する学問であり、古くは形而上学の中に含まれ、精神や精神現象を問う学問であったが、一九世紀以降実験的方法をとり入れて実証科学として確立された。一般心理学・動物心理学・発達心理学・社会心理学・臨床心理学など、多数の分野がある。

心理学は、心を研究対象とし、心の中での相互作用、心と体の相互作用を研究する学問だと言える。意識が存在するのかという点について、これまでの科学は物質世界だけを議論の対象にしてきたので、意識の母体である心の存在については不明確であった。

しかしながら、創造目的論においては、意識の母体である心を、肉体と相対的關係を持つ個体として考える。心と体の相互作用によって、生物は存在し、発展していく。

医学は、人体や病気の本態を研究し、病気の予防・治療を行い、健康を維持するための学問であり、基礎医学・臨床医学・社会医学からなる。

医学は、細胞、組織、器官相互の相互作用、および人体と、人体と関わりを持つものとの相互作用について、特に健康維持を中心的目的として研究する学問である。



### 第三章 3つの命題と各思想との関わり

これまで、自然とはなぜこのような姿をしているのだろうかという素朴な疑問に対して、いくつかの捉え方がなされてきた。その代表的なものは、目的論、機械論、進化論である。これらが創造目的論から見た場合にどのあたりに位置付けられるのかを確認してみたい。

#### 第一節 目的論

目的論とは、すべての事象は何らかの目的によって規定され、その目的に向かって生成変化しているとする哲学的立場である。生物に即して言えば、生物自体が目的を持っており、その目的を実現するような姿もしており、進化もするという考え方である。例えば、植物は、繁殖して多くの実をみのらせるという目的を持っており、そのために種が遠くまで広がるようにさまざまな工夫をこらした、とする考え方である。

目的論はすべての事象に目的があることを捉えたが、その目的性がいったいどこからくるのかといえ、すべての存在は絶対者の創造目的によって存在しているので、それぞれが持っている目的性も絶対者の創造目的からもたらされるのである。

#### 第二節 機械論

機械論とは、すべての事象の生成変化を自然的、必然的な因果関係によって説明し、目的や意志の介入を認めない哲学的立場、また、生物を精緻な機械と考え、生命現象を物理化学的法則で解明しようとする立場である。機械論は事物間に相互作用があることを前提とした考え方であるが、この相互作用が何に由来するのか全く問題にしない立場である。

創造目的論から見ると、相互作用は絶対者の創造目的によって事物間の相対的關係を通してもたらされるのである。

#### 第三節 進化論

進化論は、生物のそれぞれの種が単純な原始生物から進化してきたものであるとする考え方である。ラマルクの用不用説、ダーウィンの自然淘汰

説、ド＝フリースの突然変異説などがある。現在では進化の要因は何であるかが研究されている。

進化論は、生物を取り囲む相互作用によって進化がなされることを捉えたが、その相互作用を生存競争として闘争的なものと捉えたのである。創造目的論から見ると、生物の相互作用は創造目的を中心とした調和的なものである。

ラマルクの用不用説は、生物個体において、多用する部分はしだいに発達し、用いない器官は退化し、その後天的な獲得形質が遺伝することにより進化の現象を現すという説である。多用するとは、他との相対的關係による相互作用の結果を生物個体が多く受けるということであり、用いないというのは、相互作用による結果を受けないということである。多用する部分がなぜ発達するのかという理由についてラマルク説では触れられていない。創造目的論から見ると、遺伝子は絶対者の創造目的によって創られており、遺伝子は多用する部分が発達するように出来ているからだということができる。

チャールズ・ダーウィンらの自然淘汰説（自然選択説）は、生存と繁殖に有利な性質をもつ個体が増えていくことで進化が起きるとする説である。

1. 親が子を産むときに性質が遺伝する。
2. 遺伝した性質には、親と子、子どうしの中に個体差がある。
3. 個体差により次世代に子を産む期待値に差が生じ、期待値が高いものが生き残るという自然選択が繰り返される。

自然選択が起きる理由として、生物の繁殖能力が環境の収容能力より大きく、生まれた子どうしや他の生物との間に生存競争が生じるためであるとした。

自然淘汰説は期待値の差が進化を生み出すという説だが、その大前提として、親から子が生まれるという繁殖、性質の違いが生じる器官の存在が

ある。

すなわち、繁殖器官その他の器官が出現した後は自然淘汰説のいうメカニズムで進化を説明することができたとしても、器官の出現自体を自然淘汰説で説明することはできない。創造目的論の立場から言えば、絶対者の創造目的により器官が器官として造られ相互作用を開始したのちに自然淘汰説を適用することができよう。

ド・フリースの突然変異説は、遺伝子に突然変異が生じることによって進化が起きるといふ説である。突然変異とはDNAやRNAという遺伝物質の塩基配列に起きる永久的な変化であり、突然変異は、DNA複製の際のエラーなどによって引き起こされる。

突然変異説では、DNA複製のエラーが進化の原動力になっていることまでは理解できたが、それがなぜ進化につながるのかという理由までは説明できなかった。すなわち、突然変異で新しい器官が出現したとしても、それが母体や他の器官との相対的關係を持たなければ進化と呼ぶことができないのである。つまり、突然変異という言葉がふさわしいかどうかは別にしても、その変異が絶対者の創造目的に沿った形でなされるからこそ、相対的關係を持つことができ、進化につながるのである。

このように、これまでの進化論は、創造目的を抜きにして検討されてきたので、いずれも部分的な論理にとどまっていたのであるが、創造目的を中心としてとらえることによって、これらがどこのことを言った論理であるかが明確になり、論理に整合性が出てくるのである。

## 第四章 3つの命題がもたらすもの

創造目的論において3つの命題が確認されたことによって、私たち自身や私たちの社会とはいかなる存在であるのかが明確となった。人間は、絶対者の創造目的のもとに生まれてきた存在である。ゆえに、人間のあるべき姿は絶対者の創造目的と一致した姿である。

人生や社会を幸福にするための指針は間違いなく3つの命題から導き出される。「人間が幸福になる」とはどういうことかといえば、「絶対者の創造目的に一致する」ということである。

同様に、幸せな家庭を築く、幸せな社会を建設する、ということも、絶対者の創造目的と一致した家庭を築く、絶対者の創造目的と一致した社会を建設する、ということである。

### 第一節 人生を幸福にする秘訣

#### 1. 3つの命題に沿う

人間は生まれながらにして、絶対者の創造目的のもとにある。子供の時代、青年の時代、夫婦の時代、親の時代、子供が独立したあとの時代、死後においても、つねに人間は絶対者の創造目的のもとにある。

それぞれの時代において、絶対者の創造目的と一致した姿があり、それを求め実現することこそが、人間の最高の幸福である。

物質世界は、人間が創造目的を実現するための対象物として、絶対者によって創られたものである。ゆえに物質世界自体に人生の目的があるわけではない。お金や家財産などに価値があるわけではなく、それらを使っていかに創造目的を実現するかが問題なのである。

あるいは、知識や名誉に人生の目的があるわけではない。それらは創造目的の達成度を示しているものである。創造目的を忘れたところで知識や名誉を追い求めても幸福になれるとは限らない。

人生とは絶対者の創造目的に向かっていく道である。楽しい道のりもあり、険しい道のりもあり、ときには行くことの難しい道のりもあるかもしれない。しかし、人間がなぜ人生を歩むのかといえば、絶対者の創造目的があるからなのである。

天国とか浄土とかが何を基準にしたものかといえば、これは絶対者の創造目的を基準にしている。これに一致した人間の住むところが天国とか浄土のことである。それはなぜかといえば、人間は絶対者の創造目的のもとに生まれてきたからである。絶対者は霊界においても絶対者であるし、人間は肉体を脱いで霊となったとしても絶対者の創造目的のもとに存在しているからである。

## 2. 宗教が教えてきたこと

宗教が教えてきたことの究極的な意味は、個人を絶対者の創造目的に一致させようということであった。

仁・義・礼・智・信が美德とされるのは、これらが絶対者の創造目的に一致した人間の姿を形容しているからなのである。

煩悩を除去して涅槃の境地を求めるのは、創造目的に一致した人間に至る道のことである。

自然と渾然一体化することを求めるのは、自然が絶対者の創造目的に一致した姿でたたずんでいるからである。

救世主を求めるのは、救世主が絶対者の創造目的と一致しているから、そこにおいて絶対者の創造目的と一致することができるからである。

実践こそ究極と言われるのはなぜかといえば、実践することが絶対者の創造目的を実現することになるからである。

## 第二節 家庭を幸福にする秘訣

### 1. 家族とは

父親と母親、そしてその間に生まれてきた子供たち、という家庭の姿は、絶対者の創造目的を実現する形として絶対者によってもたらされたものである。

人間がなぜ男性と女性に分かれているのかといえば、そこに相対的關係が成り立つためであり、相互作用を通して家庭を築き、絶対者の創造目的を実現するためである。ゆえに家庭は絶対者の創造目的と一致していることが最も幸福である。

## 2. 愛とは

男女の間に求められるものは真実なる愛である。誰しも結婚するときは真実で永遠なる愛を願っている。すなわちこれは絶対者の創造目的と一致しているのである。真実なる愛は相手のためを思う奉仕的な愛である。そこには永遠不変性がある。反対に自己中心的な偽りの愛は永遠性がなく絶対者の創造目的と一致していない。

## 3. 一族繁栄の道

絶対者の創造目的と一致した伝統を育む一族が繁栄の道をたどることは間違いない。その逆に、一族の伝統が絶対者の創造目的と一致していなければその一族はいつしか崩壊してしまうであろう。

### 第三節 社会を幸福にする秘訣

社会や国においても、繁栄の原則は変わらない。絶対者の創造目的に一致しているか否かが社会の繁栄を決める。

社会は、家庭という人間関係の基本単位が展開していった結果として構成されたものである。男性と女性という相対的關係があつて、その相互作用の結果生じたのが家庭であり、社会である。男性と女性という相対的關係があつてはじめて社会も構成されるのである。

#### 1. 社会を幸福にする政治

政治とは社会全体を統合することであるが、その仕方が絶対者の創造目的に一致している場合には社会は繁栄の方向に導かれ、一致していない場合は滅亡の方向に傾いていかざるを得ない。

#### 2. 社会を幸福にする法律

法律は社会秩序を維持するためのものであるが、社会の根本は絶対者の創造目的である。社会の構成員も絶対者の創造目的のもとに生きているし、家庭も、地域も絶対者の創造目的のもとに存在している。ゆえに、社会秩

序の根本は絶対者の創造目的である。法律の基準も絶対者の創造目的に他ならない。絶対者の創造目的に反するような行為を処罰の対象として規定することが、社会全体と各構成員を善と幸福の方向に導く真なる法律だと言えよう。

### 3. 恒久平和を求めて

国を越えた世界という段階においても、絶対者の創造目的のもとに存在していることに変わりはない。人類は一家族社会である。国家は己の利害より以上に絶対者の創造目的を求めべきである。国境などというものは絶対者が創ったものではない。国境はなくさなければならない。そして、人類全体は絶対者の創造目的と一致しなければならないであろう。

## 参考文献

大辞泉	小学館
原理講論	株式会社 光言社
統一思想要綱	株式会社 光言社

## 創造目的論序説

---

2005年4月発行

著者 創造目的学会

<http://pocs.info/>

住所 〒273-0036 千葉県船橋市東中山2-3-9-II202

I P 電話番号 050-3574-5425 (担当 森田)

E-M a i l contact@pocs.info

---